

村でただ一人の 歯科医

「平家落人の里」として知られる宮崎県椎葉村。人口三千人のこの村でただ一人の歯科医として活躍する大森健一さんは、歯学部を卒業後、故郷の横浜で勤務医をしていた。

しかし、「これなら誰にも負けない」というものを身につけなければ歯科医として一生働くのは難しいのでは、と不安を感じ、鹿大の歯学研究科に入学。博士号取得後は再び勤務医となった。しかし、人



平成23年に移転したクリニックの外観。開業当時は村の法務局を改装した建物を使っていた

の役に立ちたい、人と違ったことをしたいと考えるようになった大森さんは「無歯科医村」での開業を思い立つ。

いくつかの自治体にメールを送ったところ、当時の椎葉村の助役から直々の電話があった。村の熱意にも背中を押され、大森さんは椎葉村での開業を決意。平成14年に「椎葉おももり歯科クリニック」を開業した。「初日の診療開始は9時だったのですが、7時30分にはすでにクリニック前に患者さんが並んでいたため、急遽入口を開けて、慌てて準備を始めました。それほど待ち望んでもらえるなんてやっぱり嬉しいですよ」と大森さんは振り返る。

横浜では医師を9人抱える歯科医院に勤め、診療報酬も1、2位を争う「人気歯科医」だった大森さん。「子どもの診療と入れ歯以外は誰にも負けない」という自負があった。ところが、椎葉村では子どもと高齢者の診療がほ

とんど。大変なところに来てしまったと思ったが、勉強を一からやり直した。今や「趣味は入れ歯の勉強」というほどの得意分野に。日々の診療

の他、村の全小中学校7校の学校医、老人ホームへの往診やホーム職員への口腔ケア指導なども引き受ける。今後は自宅介護を受ける人のための往診も増えると考え、勉強を続けている。「他に歯科医院がないので、患者さん一人ひとりをずっと診られるのがここの仕事のいいところです。この人の最後の入れ歯を作るんだと思うとプレッシャーもありますが、やりがいもある。患者さんが亡くなる瞬間までおいしく食べられるよう勉強を続けたいと思います」

博士号は運転免許の ようなもの

高校時代の大森さんは「経済学部を出て銀行員に」と考えていたが、3年生の夏頃か



病院実習の風景(大学6年の時)

ら一人暮らしをしたいと思い始めた。また、人と違うことをやってみたい、という気持ちも頭をもたげてきたという。「うちの高校で一番南に行った人が宮崎の大学だったんです。だったら自分は鹿児島へ行こうと」。大森さんは受験後、指宿や開聞岳まで足を伸ばして温泉を楽しみ、すっかり鹿児島を気に入った。入学後は勉強や実習に追

われながらも、家庭教師や水泳指導のインストラクターのアルバイト、ソフトテニス部での活動にも精を出した。

一年の勤務医生活を経て入学した大学院では、歯科理工学が専門の井上勝一郎教授

(当時)の研究室で印象材(歯の型を取る材料)の性質向上に関する研究に取り組む。井上教授は「大学院に進むのなら親に迷惑をかけちゃいけないよ」と、奨学金の手配や歯科医院でのアルバイトの紹介までしてくれた。「『その代わり土日や夜間も指導してください』と休日や夜間も指導してくださった。井上先生は『博士号はあくまで運転免許のようなもの』とよくおっしゃっていました。院生が修了後も自分で考えたことを何とか論文や学会で発表できるようにスタート地点に立ってもらえるように指導している、と。非常に面倒見がよく、神様のような方でした」と大森さんは今も恩師に感謝している。



学位授与式の日、
恩師の井上勝一郎教授と

歯科医

大森健一

歯学部卒業



おおり・けんいち／昭和46年神奈川県横浜市生まれ。私立聖光学院高等学校卒業。平成7年鹿児島大学歯学部卒業後、横浜で勤務医となるが、翌年同大学院歯学研究科に入学、平成12年博士課程修了。再び横浜に戻り勤務医に。平成14年7月、宮崎県椎葉村で「椎葉おおり歯科クリニック」開業。趣味は入れ歯の勉強、愛車でドライブ、毎朝5時からの妻との散歩。

鹿大 三才

KADAI
JOURNAL

鹿大広報

No. 193
SUMMER/2013

www.kagoshima-u.ac.jp/



■ 特集 ■ 前田芳實学長 就任